

わが国にある外国人経済学者の文庫

杉原四郎

(関西大学教授)

I

わが国の図書館では、経済学者の個人的な蔵書をそのまま譲りうけ、もとの所有者の名を冠した文庫として所蔵している場合がよくある。今これをわが国の経済学者と外国の経済学者とに分け、前者の主要な例を各地域から一つずつ北から順にあげてゆくと、(イ)手塚〔寿郎〕文庫(小樽商大)、(ロ)稲田〔民藏〕文庫(東北大学)、(ハ)左右田〔喜一郎〕文庫(一橋大学)、(ニ)福田〔徳三〕文庫(大阪市大)、(ホ)森戸〔辰男〕文庫(広島大学)、(ヘ)武藤〔長藏〕文庫(長崎大学)などがある¹⁾。ここでとりあげるのは後者、すなわち外国の経済学者のまとまった蔵書がわが国の図書館に所蔵されている場合であって、前者とくらべて事例としては当然すくないけれども、いずれもつづよりの学問的意義の高い文庫ばかりである。本稿ではその中で代表的な六つの文庫、すなわちやはり北から順にあげると、シュル文庫(小樽商大)、スミス文庫(東京大学)、メンガー文庫(一橋大学)、シュンペーター文庫(同)、ビュッヒャー文庫(京都大学)、ゾンバルト文庫(大阪市大)をとりあげ²⁾、

1) これらのうち(イ)と(ハ)については、それぞれ1966年、1942年、1952年に冊子目録(ただしいずれも洋書のみ)が刊行されている。

2) 経済学関係のものとしてはこの他に、法政大学・大原社会問題研究所のエルツバッハー(Paul Eltzbacher, 1868-1928)文庫と京都大学のマイアー(Georg von Mayr, 1841-1925)文庫があげられようが、前者は無政府主義の研究家、後者は統計学者の文庫なのでここでははぶいた。前者(約1,150冊と定期刊行物103種)については『大原社会問題研究所雑誌』Vol. VII, No.2とNo.3(1930)にカタログがのっている。後者については汐見三郎「マイアー文庫」、『経済論叢』Vol. XXIV, No.3, 1929を参照。マイアー文庫(約2万冊の他に定期刊行物など多数)については、単行本のみの冊子目録(Katalog der Bibliothek des Dr. Georg von Mayr. 1933)が京都帝国大学経済学部から出されている。また福田文庫の中には彼の恩師ブレタノ(Lujo Brentano, 1844-1931)の蔵書が約7,000ふくまれており、武藤文庫の中にはコーン(Gustav Cohn 1840-1919)の蔵書がかなり多数ふくまれており、大原社会問題研究所のために稲田民藏が1921年ドイツで買いあつめたものの中には、約1,400部のハスバッハ(Wilhelm Hasbach)文庫がふくまれている。なお外国人学者の経済学関係の蔵書をわが国の図書館が購入した例のハシリとしては、高野岩三郎の努力で、1900年に東京大学が購入したニンゲル(C. L. E. Engel, 1821-1896)文庫があるが、1923年の関東大震災でほとんど潰滅し、今では目録だけがのこっているという。

その内容を説明するのだが、最初にこの六つの文庫を比較対照した一表をかかげ、一応の概観をえる便宜に資することになろう。

			(1)	(2)	(3)
スミス文庫	Adam Smith (1723-1790)	東京大学	1924	308	1951
シエル文庫	Gustave Schelle (1845-1927)	小樽商大	1924	1269	1962
メンガー文庫	Carl Menger (1840-1921)	一橋大学	1922	18602	I 1926 II 1955
ビュッヒアー文庫	Karl Bücher (1847-1930)	京都大学	1924	8869	1969 (予定)
ゾンバルト文庫	Werner Sombart (1863-1941)	大阪市大	1929	8091	1967
シュンペーター文庫	Joseph Alois Schumpeter (1883-1950)	一橋大学	1955	5701	1962

(1)は文庫が大学にうけ入れられた年。(2)は蔵書数(シエル文庫とゾンバルト文庫とは目録のアイテム番号による。シュンペーター文庫は、その後の追加や調査では3,615冊となるとのことである)。(3)は冊子目録の公刊された年である。

II

(1) スミス文庫

(a)由来 スミスの蔵書を相続した従兄弟の D. グラスは二人の娘にそれを二分してのこしたが、このうちの一人 Mrs. カニングムが相続したもの的一部は息子の Prof. R. O. カニングムに継承され、その一部が彼の死(1918)後ロンドンの古本屋に売物に出された。1920年ロンドンに滞在していた新渡戸稲造がこれを知り、グラスゴー大学からの申し込みと一足違いで購入、東京大学経済学部へ学部新設のお祝いとして寄贈した。

(b)内容 141種308冊のうち、英語の本が約半数、あとはフランス語、ついでラテン語やイタリー語が多く、その八割が18世紀の刊行物である。スミスの全蔵書の一割五分にも達せず、また経済学の書物は一冊もないが、内容は哲学・文学・政治学・歴史・地理など多方面に及び、スミスの視野の広さをあらわしている。とくに矢内原忠雄の指摘するように、「生物学・医学等に関する書物がスミスの蔵書のうちに多く、彼が自然科学に興味をもったことは、彼の学風と思想、ひいては第18世紀の思想を理解する上において注目すべき事実であらう¹⁾。またスミスの蔵書の中には製本に凝ったのがあり、また本への書き込みなど見あたらず、大へん鄭重にあつかわれているのは、後述のメンガーの場合と対照的で、スミスが読書家であつたばかりでなく、愛書家でもあつたことをしのばせる。

(c)冊子目録 Yanaihara Tadao, *A full and detailed Catalogue of Books which*

1) 矢内原忠雄「東京経済学部所蔵アダム・スミス蔵書について」、アダム・スミスの会/大河内一男編『アダム・スミスの味』, 1965, p.211-212.

belonged to Adam Smith, now in the possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo, with notes and explanations. 1951, Iwanami Shoten, 135p. 巻末に写真図版6。各冊をボナー・カタログ(第2版)と対照した結果が注記されている。Appendix 1 はロンドンから送られてきた蔵書の中にあった、スミスの死後の出版物二冊を掲げ、Appendix 2 は、やはりその中にふくまれていた、1781年にスミス自身がつくらせた蔵書目録を印刷している(そのp.1とp.10の写真版が巻末にある)。なおこの矢内原版の目録の日本語解説版が準備中とのことであるが、今のところ未刊である。

(d)補遺 現在のスミス文庫には上記のカタログにあるもの以外に2冊が追加されている。大河内一男氏が1954年にロンドンで入手し、後東大に寄贈した S. Thomas, *The British Negotiator*, 1759 と、同年東京での古書売立会に出ていたのが東大によって購入された羊皮紙、手書きの『ヴェネチア刑法』とがそれで、共に元来スミスの蔵書だったものである²⁾。

(e)感想 新渡戸の植民政策の講義にはスミスの植民論が肯定的にたびたび引用されている³⁾が、スミスの思想に共鳴するところの多かった彼によってこの蔵書がわが国にもたらされ、彼の学統をうけついで矢内原⁴⁾によってそのカタログが完成されたことは興味ぶかい。大河内一男氏は、この文庫は日本の学史家にとって実用的価値のほとんどない「宝物」的存在だとしながらも、「日本におけるスミス研究が、やはり直接間接、こうした『宝物』の保管と存在で刺戟されていることは疑えない⁵⁾」とのべているが、同感であって、矢内原が初代の、大河内氏が二代目の会長である「アダム・スミスの会」(1949)の生誕とその活動などは、この「宝物」の刺戟が生み出した最も大きな成果の一つだといつてよいだろう。

(2) シェル文庫

(a)由来 小樽高商教授の手塚寿郎(1895—1943)が1920—1925年のパリ留学中に購入して母校かつ勤務校の図書館におさめたもの。手塚は福田徳三門下でワルラスの『純粋経済学要論』の訳者として有名だが、パリにおける若き日の彼の研究の

2) この点については『アダム・スミスの味』, pp.312-318 にくわしい。なお出口勇蔵氏の報告によれば、スミスの蔵書の一部(1782年に出た W. トムソンの2冊本の旅行記)京都大学の図書館が所蔵しているとのことである。同書 pp.305-312 を参照。

3) 矢内原忠雄編『新渡戸博士植民政策講義及論文集』, 1943, pp.24, 101, 107, 113, 122, 147を参照。

4) 大内兵衛「日本植民学の系譜」(南原繁編『矢内原忠雄』, 1968, 所収)を参照。

5) 大河内「アダム・スミス巡礼」, 『欧米旅行記』, 1955, pp.235-236. (『アダム・スミスの味』に再録, 同書 pp.172-173)。

「関心は、ワルラス研究をふかめながら、一般均衡論の先駆者としてのケネーにいたり、また心理的経済価値学説をさかのぼって、チュルゴ、コンディヤックからさらにフランス啓蒙思想全体へひろがっていった」⁶⁾。こうした手塚の問題意識にピッタリ適合したのが、重農主義の研究者シュールの文庫だった⁷⁾のである。

(b)内容 全体の98%以上がフランス語の書物。シュールの研究歴から推測されるように、広義の重農主義者の著作を中心とする18世紀と19世紀のフランス経済思想史および経済史の古典的文献を豊富にそなえている。残念ながらシュールの発見したケネー経済表の第3版は含まれていない。また河野健二氏によればフランス革命に関する直接史料もかなり多く、「革命直前の名士会の議事録、革命談会の布告、諸委員会での報告のほか、ネッケル、ベンオン、ボワン・ダングラなどの著作を含んでいる。革命以後の時期についても議会記録や官庁報告が相当集められており、1860年代の博覧会記録とともに、フランスの産業革命研究にとっても利用価値の大きいものである」⁸⁾。

(c)冊子目録 *L'Université du Commerce d'Otaru, Catalogue de la Bibliothèque du Professeur Gustave Schelle de L'Université du Commerce d'Otaru, 1962.* Keiso Shobo. 114p. 巻頭に加茂巖一学長の序言と浜林正夫助教授の編者例言がともにフランス語で書かれている。序言によれば坂田太郎教授および津田内匠夫妻が編集に協力された。

(3) メンガー文庫

(a)由来 この文庫の購入事情については、実際その衝にあたった一人である金子鷹之助のメンガー生誕百年の記念講演⁹⁾にくわしく語られている。それによれば、東京商大の金子、大塚、孫田、内藤、渡辺の諸氏が、1922年にベルリンで大学の購入すべき文庫を物色中に、「大塚(金之助)君がメンガー文庫が売物に出ていることを嗅ぎつけて来ました。この文庫はアメリカのセリグマン文庫と相並んで世界の

6) 「手塚寿郎教授の人と業績」, 坂田太郎他編『フランス社会思想史文獻目録』, 1966, p. IV.

7) 手塚文庫にはシュールの主要著作(デュボン・ドゥ・ヌムール論, グルネー論, チュルゴ論)および彼の編集したチュルゴ全集がすべておさめられている。前掲書, pp.249, 270. なおシュール版のチュルゴ全集の校訂の厳密性については、津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』(1962)の訳者まえがき(p.5)を参照。

8) 河野「シュール文庫の巻」(文庫めぐり・その八), 『経済学史学会関西西部会通信』No. 9 1962, p. 8.

9) 金子「メンガー文庫購入と当時のウィーン事情」, 『経済往来』第13号, 1940. なお山田雄三「カール・メンガー生誕百年」(『一橋論叢』Vol. 5, No. 3, 1940)にもこの文庫のことがのべられている。

二大逸物なので、……佐野学長に打電しました。すると『交渉せよ』との返電が来たので、大塚君と私とが喜び勇んでウィーンへ出かけました。大塚君はメンガーの経済原論や価値論をやっていましたし、私は『社会科学方法論』をやっていたので、夫人をつかまへて故メンガー教授の学問を讚美しますと、我々の純真な態度に夫人は大変よろこんで、『外へ売らないで、東京商大へ是非売りたい。但値段は値切らないで呉れ』ということです。外にはアメリカ人、イギリス人、フランス人それから某日本人も買いに来ているので競争は仲々激烈なのです。こうして値段の問題の他にも、ウィーン大学の学生の反対運動や為替の問題など、購入をめぐる種々の難関はあったが、結局すべて解決し、文庫をハンブルク「から郵船の貨物船に積んで日本へ送ったのでした。出帆の電報が来た時、われわれは万歳を唱えました」¹⁰⁾。

(b)内容 一橋大学にあるメンガー文庫は彼のコレクションのほとんど全部¹¹⁾であって、その主要部分は冊子目録第I部に掲載されているところの、英・独・仏・伊およびラテン語の経済学を中核とする社会科学文献である。目録IIにリストされているように、デンマーク語やオランダ語・ロシア語などで書かれた社会科学文献のほか、歴史・社会学・法学などに関するものもあるが、民族学と旅行記がかなり多いのが目立つ。メンガーは蒐集すべき文献をメモしたノートをいつも携帯して、網羅的系統的な蒐集につとめたようである¹²⁾が、彼はこうして丹念にあつめた書物を書架にならべておくだけでは決してなく、自己の思想をみがく道具として使用し、著者との対決の記録をアンダーラインや？や！を書物の各所に記入するのみならず、余白への評註の書き込みをずいぶんやっているものであって、このような彼の手沢本を多数ふくんでいることが、この文庫の特色である。メンガーの書き込みノー

10) メンガー文庫が日本人の手に入ったことがヨーロッパの古書商人にどんなに大きなショックだったかについての興味ふかいエピソードを、都留重人氏はハロルド・ラスキのホームズ判事あての手紙を引きながら語っている。都留『近代経済学の群像』、1964、pp.27-28。

11) コレクションの中で哲学に関するものは令息によってシカゴのMidwest Inter-Library Centerに移譲されたという。Cf. R. S. Howey, *The Rise of the Marginal Utility School 1879-1889*. 1960、p. 230。

12) 一橋大学図書館の山口隆二氏によれば、メンガーは「このノートを紛失した場合のことを考え、ノートの裏表紙に『このノートの拾得者には20クローネの謝礼をする』と書いて彼の住所氏名が付記されているが、その後ノートの記載が充実してくるにつれて、謝礼も50、100、140クローネと増額し、書き改められており、転居毎に新住所が書き込まれている」。山口「一橋大学図書館のカール・メンガー文庫」、『日本古書通信』Vol. 31, No. 10. 1966、p. 1. なお *Katalog II*, p. viii を参照。

トの一部はすでにニミール・カウダー教授によって紹介されている¹³⁾。

(c) 冊子目録 東京商科大学附属図書館編, *Katalog der Carl Menger-Bibliothek in der Handels-Universität Tokio* [I], Tokio, 1926. 一橋大学附属図書館編, *Katalog der Carl Menger-Bibliothek in der Hitotsubashi-Universität*. II. Tokio, 1955. IIの巻頭にはメンガーの肖像や『国民経済学原理』第一版の書入れ本, 蒐集ノートなどの写真をふくむ11の図版がおさめられている。また巻末にI, IIを通じた著者名索引がついている。

(d) 感想 メンガーがウィーン大学のスタッフになるのは1872年で, 伊藤博文がローレンツ・フォン・シュタインの憲法の講義をきいた1883年にはすでに経済学担当の正教授になっているのだから, 同僚のシュタインから極東の新興国のことをきいたこともあるかもしれない。しかしそれ以後わが国の経済学者の留学生はドイツの大学が多かったので, 1903年に彼が退職するまでにウィーンで彼の講義に列した日本人は稀だったと思われる¹⁴⁾。だが彼の主著は夙にわが国で邦訳され, メンガーならびに彼の創設したオーストリー学派の研究は, 丸谷喜一, 杉村広蔵, 山田雄三, 林治一らの人々の手で開拓されてきた。三年後にむかえる『国民経済学原理』刊行百年の頃には, メンガー文庫をふまえての一層つっこんだ研究成果がこの国に生れることが期待される。

(4) ビュッヒャー文庫

(a) 由来 神戸正雄「カール・ビュッヒャー」(『経済論叢』Vol. 10, No. 5, 1920, pp. 722—724) によれば, 「最近に独逸ライブチッヒの老舗フォック書店からわが大学に向けてビュッヒャー教授の全蔵書の売物があるが買わないかとの電話が来た。買いたいことは山々であるが, 其値が英貨四千磅であるので, 到底我大学の乏しき力及ばずとして買得ないで居る」。そこで神戸はビュッヒャーの人と業績を紹介しつつ彼の文庫が渡日することがどんなに大きな意義があるかを力説し, この購入資金を寄附するように「篤志の仁」にうったえた。ところが翌年の『経済論

13) Emil Kauder, *Carl Mengers Erster Entwurf zu seinem Hauptwerk "Grundsätze" geschrieben als Anmerkungen zu der "Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre" von Karl Heinrich Rau*, Hitotsubashi Universität, 1963. Kauder, Menger and his Library, 『経済研究』, Vol 10, No. 1. 1959.

14) 高野岩三郎はミュンヘン大学に留学中1901年5月から6月にかけて「約3週間奥国ウィーンに修学旅行をこころみ」, その間「フィリポヴィッチやカール・メンガーやの諸教授の講義を一, 二回ずつ聴聞したことが日記に記してある。しかし諸教授の風采や講義ぶりなどについては今全く記憶に存しない」と後年回想している。高野「独逸留学日記の中より, 特にマイヤ先生について」, 『統計学古典選集の叢』, No. 9, 1943. 遺稿集『かっぱの鹿』, 1961, p. 119.

叢』(Vol. 12, No. 3, 1921, pp. 493—497)にのった小川郷太郎の「ビュッヒャー文庫」によれば、「三菱合資会社社長男爵岩崎小弥太氏は之を買はれて我大学に寄附せられることになった」。すなわち岩崎がこれを三菱のために買おうとしていることを聞いた「吾々はビュッヒャー文庫に依て最も益を受くるものは経済学を研究する学徒でなければならぬと信じたので、男に此意を通じた所が、男は……三菱合資会社社長の名を以て挙げて之を我京都帝国大学に寄附せらるるに至ったのである」。当時まだライプツィヒ大学の教授であったビュッヒャーがなぜその蔵書を全部手ばなしたのかに神戸も疑問を表明していたが、小川はこの点についてつぎのように書いている。「ビュッヒャーが今自らの宝庫を手離しするに至ったことを思うと、其心事において非常に苦しいことがあるに相違なからう。是も皆戦争の生んだ悲劇に外あるまい、聞く所に依れば独逸の学者は非常に生活に窮しているということである、……吾々は独逸学者のために同情せざるを得ない」。

(b)内容 単行本6,353部,8,899冊のほか、小冊子や博士論文が約3,500冊と、新聞切抜きが多数ある。ドイツ語文献が圧倒的な比重をしめ、経済史、経済学史、経済・社会政策のほか、統計学や法制史に関するものもすくなくない。平井俊彦氏によれば、Kameralismusの古典が多いことが特筆すべきであり、ドイツ歴史学派の中でリストの文献が欠けているのが気になるのとことである¹⁵⁾。

(c)冊子目録 単行本については大体戦前に整理がすんでいたが、其他のもの整理は最近はじまり、小冊子や博士論文の整理は完了、120の箱に100点ぐらいつづ入っている新聞切抜きの整理も漸く見通しがついたので、明年度にはいよいよ目録の作成と公刊が日程にのぼるとのことである。

(5) ゾンバルト文庫

(a)由来 大阪高商は昭和3年大阪商大に昇格したが、その翌年ゾンバルトの蔵書のうち経済学と社会主義に関する11,574冊を、14,307マルク(約7万円)で購入した。幸い戦災には会わなかったが、戦後校舎が占領軍に接収され、仮住いの小学校を移動している過程で、かなりの散逸と損傷をこうむった。ゾンバルトが1929年にどうしてその蔵書の一部を整理したのかはさだかでないが、主著の一つである *Der moderne Kapitalismus* (1902—1927) を完成した後の彼の研究関心の変化が、

15) 平井「ビュッヒャー文庫の巻」(文庫めぐり・その六、『経済学史学会関西会通信』No. 6, 1961, pp. 10—11. なおビュッヒャーの講義をきいた最初の一人福田徳三は、彼の主著『国民経済の成立』について「予が経済学に於ける先づ心眼を開かれしは實に先生にして、就中右書は莫大なる刺戟を研究の直途に於て与へられたり」とのべ、その中の「人類原始の経済状態」の全部と「自然人の経済」の一部を帰朝後に訳出している。福田『経済学全集』No. 3, 1925, p. 467を参照。

その原因の一つとも考えられよう¹⁶⁾。

(b)内容 いくつかの特徴を列挙すると、(i)経済と社会主義関係のものが全体の約六割をしめるが、経済部門では各国の経済史上の資料的文献とドイツ歴史学派の研究業績が多い。(ii)学位論文、小冊子および雑誌論文の抜刷がかなりある。(iii)多方面に及ぶユダヤ人問題文献が数百冊ふくまれているのはこの問題への彼のうち込み方をしのばせる。(iv)154種(数百冊)にのぼる雑誌類はドイツの社会運動関係のものが多い。

(c)冊子目録 ゾンバルト文庫目録刊行会編『ヴェルナー・ゾンバルト文庫目録』*Katalog der Werner Sombart-Bibliothek in der Städtischen Universität Osaka*, 1967, 日本評論社, 359p. 巻頭に、ゾンバルト文庫目録刊行会の裕正夫会長の序、ゾンバルトの令息 Dr. Nicolaus Sombart から送られたドイツ語の序文、会長あての手紙および故人の写真二葉、および小谷義次氏の解説(かつて『経済学史学会関西部会通信』の「文庫めぐり・その九」として発表されたもの)とをおさめている¹⁷⁾。

(d)感想 ゾンバルトの著作は、*Sozialismus und Sozialbewegung* (1896) が1903年に神戸正雄によってわが国に紹介されて¹⁸⁾以来、主要なものはほとんど邦訳されて来たので、当代のドイツの経済学者の中ではわが国で最も有名な一人となり、その学説をとりあげた多くの労作が出た。ゾンバルトは1917年以来ベルリン大学の教授となったのだが、そこで彼の講義をきいた人もすくなくあるまい。そこで1941年のゾンバルトの逝去に際しては、わが国の研究家の幾人かが追悼の意をこめて彼のために筆をとった。高島善哉「ゾンバルトの学史的地位」(『一橋論叢』Vol. 8, No. 1, 1941) や、戸田武雄「ヴェルナー・ゾンバルト」(『経済往来』No. 17, 1941) はその例である。また歿後十年目には大塚金之助「ゾンバルト教授のゼミナール」(『一橋新聞』1951年5月20日) が書かれ、1922年ごろの彼の Führer というテーマのゼミナールの模様が回想された。だがこれらの文章はゾンバルトの蔵書がわが国に伝来していることに一言もふれていない。昨春刊行されたこの文庫の目録をつ

16) 「しかし、他面」と小谷義次氏はつぎのような疑問をのこす。「処分され購入された蔵書のうちには龐大な社会運動ないし社会主義関係の文献をふくむ点と、その後かれのこの点にかんする関心がなお一定期間存続していたという事情——たとえば1934年の『ドイツ社会主義』を見よ——を考え合わせればあい疑問は必ずしも氷解しない」。小谷「ゾムバルト文庫の巻」、『経済学史学会関西部会通信』No. 10, 1962, p. 5.

17) この目録は見事な出来栄であるが、分類に若干の問題があるように思う。たとえば、VI. Philosophie und Religion の中に、マルクス『哲学の貧困』(6658, 6659), ルソー『社会契約論』(6696), サン・シモン『新キリスト教』(6701) が入れられているが、これらは当然他の分類項目にうつされるべきであろう。

18) ゾンバルト・神戸正雄訳述『19世紀に於ける社会主義及社会的運動』, 1903:

かって「20世紀前半のドイツが出した世界的教授」¹⁹⁾の人と業績を本格的に研究する人が、いつかこの国にあらわれるかもしれない。

(6) シュンペーター文庫

(a)由来 後掲のカタログにある東畑清一氏の「由来記」の一節を引用しよう。「シュンペーター教授が急死したのは1950年（昭和25年）1月8日のことであった。中山伊知郎君とわたしは、たまたま同行することになって同年の5月、夫人をケンブリッジのアカシア街の私邸に訪れた。曾てともにボン大学で教えを受け²⁰⁾、それ以来の縁でいろいろと先生と交渉をもっていたので、夫人を訪れてわれわれのお悔みを述べたかったからである。……その際われわれ兩人に対して、先生の蔵書を日本（ならびに確かドイツ）に寄贈したい、『分析の歴史』の整理を終えてからそうしたい、という趣旨の話をされたのである。人事はかり難く、その夫人もこの書物の出版を見ないで、1953年（昭和28年）7月に逝去した。遺言によって、蔵書はその執行者を通じて一橋大学に贈られることになった。中山伊知郎君のほかハーヴァート大学で親しく教授について学ぶこと多年であった都留重人君²¹⁾が、ともに一橋大学の重鎮として教授たるからには、この処置は当然のことであろう」。

(b)内容 シュンペーターが1932年—1950年の在米時代にあつめた総計5,701冊（前掲表の注記参照）——その中に1,500以上の各国の学者の論文抜刷りなどの小冊子と、170種以上のロシア語関係のをぞく世界の主要な経済雑誌とがふくまれている——から成っており、夫人の蔵書票の貼ってあるものも若干ふくまれている。（ドイツ時代の蔵書はボンの近郊に疎開してあったが、爆撃で焼失したという）。1930年代以降に出版された経済学関係の書物が中心。『経済分析の歴史』に登場する龐大な古典は、彼がクレス文庫の文献を駆使しえたためかほとんどこの文庫には姿を見せない。シュンペーターはいつも黄色い紙片を携帯していて、感想がうかぶとそれを書き込む習慣があったようだが、読書のときもその方法で書かれたものを当該書に挿入していた。そのノートがそのまま保存されていること、そういう意味での手沢本が多いことがこの文庫の価値を高めている。

(c)冊子目録 一橋大学、*The Catalogue of Prof. Schumpeter Library*, Tokyo, 1962. (*Additions to the Schumpeter Library*, 1967) 巻頭に1931年にシュンペーターが東京商大を訪問したときの記念写真と森田図書館長の序文および東畑氏の「由来

19) 大塚「ゾンバート教授のゼミナール」、『現代随想全集』第25巻、1955に収録。p.246.

20) ボンでのシュンペーターについては、中山伊知郎「ボンのことども」、『一橋論叢』Vol. 23, No. 3, 1948を参照。

21) ハーバート時代のシュンペーターについては、都留重人『アメリカ留学記』、岩波新書、1950を参照。

記」をおさめ、巻末に著者（および書名）索引をつけている。シュンペーターのノートが挿入されている書物は *J. S.'s notes inserted* と註記されている。

(d)感想 ここでとりあげた六つの文庫の所有者の中では、シュンペーターだけが明治生れであり、唯一の日本訪問者でもあるためか、この文庫に対するわれわれの親近感も他とくらべてずっと深い。とくに彼が日本をこよなく愛し、「われわれは芸術というものをわれわれから疎外して考える。日本人は生活のすみずみにまで芸術を生かしている」とつねに日本訪問の印象を語っていた²²⁾ことを知るとそうそうである。私は経済学史上の人物をとりあげるとき、必ずシュンペーターが『経済分析の歴史』でその人をどういう風に遇しているかを参照することになっているが、いつか一橋大学にこの文庫をたずね、ミルやマーシャルの『経済学原理』などにはさんである黄色の紙を見せてもらいたいと思っている。オーストリア式の古い速記文字でかかれているというノートを判読することはむつかしいかもしれないが、この巨匠の精神的苦斗のあとにじかにふれうことは、この文庫を身近かにもっているわれわれの特権であろう。

III

最後に全般的な感想を二三書きしるしてむすびにかえることにしよう。(1)六つの文庫のうち四つまでがドイツ・オーストリー系の学者のものであることは、明治10年代の後半以降わが国が国家的な根本方針として学術文化の範を独逸に求めることになったので、ドイツの学界との関係が諸外国にくらべて特に密接であるという伝統が形成されたことと無関係ではないであろう¹⁾。本稿でとりあげたものとまさに逆のケースにあたるものとして唯一の例と思われる大塚文庫——大塚金之助氏が日本の社会経済思想関係の蔵書を母校のベルリン大学（DDR）に寄贈されたもの——のことを思い合わせると、とくにその感を深くする。(2)六つの文庫の収蔵の時期がシュンペーター文庫をのぞいてすべて1920年代であるということは、第一次世界大戦後の西ヨーロッパとくにドイツの経済的窮乏と日本の経済力の相対的上昇と

22) 都留重人『近代経済学の群像』, 1964, p.201. なおここで都留氏はシュンペーターの蔵書が一橋大学の外にドイツのボン大学に寄贈されたと書いている (p.202) が、東畑氏の「此のシュンペーター文庫は、世界のどこかに兄弟を持っていることになる」との推測（『由来記』, 前掲, p. ix）は、ボン大学ということになるのであろうか。

1) わが国にある外国人法学者の主な文庫を見ても、東北大学のシュタイン (Friedrich Stein, 1859-1923) 文庫、ゼッケル (Emil Seckel, 1864-1924) 文庫、チーテルマン (Ernst Zietelman, 1852-1923) 文庫や、一橋大学のギールケ (Otto Friedlich von Gielke, 1841-1921) 文庫などいずれもドイツの学者のもので、経済学の場合とよく似ている。なおこの場合ドイツの知識人は他国とくらべて個人的な蔵書を集成する性向がつよいとすれば、そのこともあわせて考慮すべきであろう。

いう事情を背景に、それらがわが国に入ってきたことをしめしている。それと同時にあたかもこの時期が、わが国における「経済学の国家学からの独立」(大内兵衛)の時期にあたっていて、これらの文庫の獲得が、東大や京大における法学部からの経済学部の分離や高商から商大への昇格が実現されたことへの補強的裏づけの意味をもったとも考えられる。(3)戦前に収蔵された五つの文庫の冊子目録は、メンガー文庫の第一部のみが戦前に刊行されただけで、他はいずれも30年以上もあとにやっと刊行される——「文庫には目録が付て居ないから大学では三年計画で之を整理分類して完全なる目録をも作ろうと思っている」²⁾ という収蔵当初の計画が半世紀ちかくたって漸く実現の運びになったビュッヒャー文庫の場合は最も印象的である——という事実は、種々のことを考えさせる。冊子目録の公刊によってはじめて、その蔵書は社会にひらかれ、文化の糧となりうるのであって、これらの文庫は、1920年代に渡来したものの、1950年代以降にいたって、真に日本の、いな世界の学界の共同財産となったといつてよからう。これらの日本にある貴重な文化財を関東大震災や今次大戦の爆撃から身を挺して守り抜いた人々の偉業とともに、目録作成という地味な作業に精魂をかたむけて来た関係者の労苦に、深い敬意を覚える。(4)このような個人の蔵書が図書館の中で一括別置して保存され、しかもその目録がその文庫を保有する図書館のユニオン・カタログとは独立に出版されるというのは、水田洋氏も指摘している³⁾ ように、日本の図書館の一般的な蔵書量が欧米にくらべて貧弱なことと、図書館の管理や奉仕活動が未発達なことの一掃結としての目録出版の立ちおくれとの反映とも見られよう。そこでこうした文庫の保管方法は、その文庫の特色とその図書館全体の充実策との両方の事情をにらみ合せて最適の途を考えねばなるまい⁴⁾。代表的な大学図書館のユニオン・カタログの刊行は早急には期待できない現状だが、テーマ別の全国的なカタログの作成が、こうした蔵書目録刊行の成果をふまえてすすめられること、たとえば現に進行中の経済学古典調査の作業が目録作成の階段にまですみやかに達することがのぞまれる。

2) 小川郷太郎「ビュッヒャー文庫」, 前掲, p. 496.

3) 伊大知・水田・藤川共編『社会科学ドキュメンテーション』, 1968, p. 187.

4) たとえば東畑氏はシュンペーター文庫の雑誌類の中から一稿図書館にある雑誌の欠号を補強することを提案し、「文庫は目録のうえのみ存在し、図書館は全部を打って丸となして再整理するという希望」をのべている。東畑「由来記」, 前掲, p. x.